

妖怪「アマビエ」の出自

— “Medico della Peste”（ペスト医師）の面影—

武・アーサー・ソントン

はじめに

2019年末から始まった新型コロナウイルス、COVID-19感染拡大の中、日本のツイッターで「アマビエ」という風変わりな妖怪が広まった。長い髪をして、体には鱗があり、三本足で、鳥のくちばしのような口をした人魚のような生物で、疫病よけになるという。「#アマビエ」上では、2020年3月頃から、この江戸時代の妖怪の、可愛いものからかなりエロ・グロのものまで、様々なイメージやイラストが飛び交った。さらに、アマビエのおもちゃ、チャーム、バッグなどの小物、チョコボールなどの菓子が続々と売り出され、ついに10月には肥後国南阿蘇村の「道の駅」に、巨大な、だが可愛らしい、アマビエ像が設置され、通行人の目を楽しませている。年末に向けて、大鳥神社のアマビエ付き熊手、アマビエ付き鏡餅も売り出された。

アマビエは日本発の「可愛い」疫病よけマスコットとして、ソーシャル・メディアを通して、急速に海外にも広がり、海外の著名な定期刊行物にも取り上げられた。例えば米国の雑誌*The New Yorker*（4月9日）の記事、“From Japan, a Mascot for the Pandemic”は、まずいわゆる「可愛い」文化がいかに日本社会に浸透しているか—今や世界に広がっているハロー・キティ、ピカチュウなどだけでなく、多くの地方自治体を持つ「ゆるキャラ」、「日本の軍隊である自衛隊」までもリクルート宣伝に使っている可愛いマスコット、などなどを紹介して、「ついに世界初の公認防疫マスコットのデビュー」を宣言する。江戸時代の元祖アマビエが自分の絵姿を見て、広めよ、と伝えたように、今や日本では多くの漫画家やアーティストがアマビエの絵姿を、ソーシャルメディアを使って、日

本ばかりか世界に広めている、と報告。しかし、大昔から疫病に悩まされてきた、長い歴史の中で、日本人は様々な形で救いと慰めを求めてきたとして、記事は、世界が知る奈良の大仏の起源も、735年から2年間で国民の3分の1が死亡したと言われている天然痘のパンデミックの後に、そのような疫病を封じる祈願を込めて752年に完成した経緯を紹介。その後も日本の人々は様々な超自然の疫病よけに頼ってきたが、「今ぞ、来れ（いや、ではなくて）、再び来れ、アマビエよ」とユーモラスに、この記事は終わる。英国の新聞*The Guardian*（4月10日）では、アマビエの可愛い姿が急速に日本の庶民生活の中に浸透した背景に漫画文化として「ゲゲゲの鬼太郎」を紹介したり、厚生労働省が感染予防のポスターにアマビエの絵を使ったりしたことまで紹介して、最後に「アマビエは、日本が、不安な時代に国民統合の力として、自分自身の曖昧模糊とした過去に深く求めて入って得たもの」と位置付けている。

私が*The Japan Times* 読者欄へ、アマビエの起源を西洋とする私見を投稿したものは、4月15日に掲載された。海外の研究者から好反応があったが、限られたスペースのため論拠となる資料の詳細を示せていなかった。ので、本文はそれを補って論文としたものである。

アマビエの絵を見て、私が最初に感じたことは、これはヨーロッパの plague doctorの変形ではないか、という素朴な驚きだった。英語の“plague doctor”は日本語では「ペスト医師」と訳されているが、その起源の地のイタリア語で“medico della peste”と呼ばれた、中世に始まったペスト患者専門の医師のことである。この驚きから研究を進めた結果、江戸時代の「アマビエ」はその起源が西洋の“medico della peste”にあり、日本のグローバル化の先駆とも言える現象を暗示するのではないか、と同時に、それが名実ともにグローバル化した現代日本がいかに過去から引き継がれた独自の文化的嗜好を保持しているかをも示しているのではないか、と考えるに至った。そしてこの一見小さな社会現象が、世界における日本の歴史的、文化的特異性を示唆しているように思われることを示したい。

1.

妖怪アマビエは、京都大学附属図書館に所蔵されている、弘化三年4月中旬(西暦1846年5月上旬)の瓦版が唯一の出典と考えられている。現在同図書館のデジタル・アーカイブに収録されているこの瓦版は、上辺28.9cm、下辺28.4cm、左辺23.0cm、右辺22.6cmで、紙面左側に以下の文がある。

肥後国海中え毎夜光物出ル所之役人行
見る二つの如く者現ス私ハ海中ニ住アマビエト申
者也当年より六ヶ年之間諸国豊作也併
病流行早々私シ写シ人々二見せ候得と
申て海中へ入けり右ハ写シ役人より江戸え
申来ル写也

弘化三年四月中旬

そして瓦版紙面の右側には、今ではお馴染みとなったアマビエが海上に立つ姿が刷られている(図1)。

ただし、湯本豪一は、『明治妖怪新聞』(1999年)に、アマビエは明治時代の新聞に「予言をした妖怪」として取り上げられた、江戸後期から明治中期の資料に確認されている妖怪「アマビコ」の類型(7あるいは9型)の一つで、それが誤記されて伝わったものだろうと推測している(198頁)。アマビコの一例は、アマビエと同様に肥後国の海中から現れ、体はアマビエとは違って猿のような毛で足元まで覆われているが、アマビエのように足は三本あり、大きな目ととんがった口の顔つきである。自分は「アマビコ」と称すると自己紹介して、この先6年間は豊作であるが、疫病で多数の人が死ぬことになるだろうと予言し、自分の姿の絵を描き、それを見た者は疫病を逃れるだろうと予言する(図2)。

実は、疫病よけの妖怪は江戸時代には色々あったようだ。専門分野の研究者ではない私が入手できた資料の範囲内では、Covid-19発見のずっと前に出た、国立歴史民俗博物館発行の歴史系総合誌『歴博』第170

号（2012年1月30日）（電子版）に掲載されている、「歴史の証人—写真による収蔵品紹介—」と題する連載の「風説と怪異・妖怪—流行病と予言獣」と題する記事が興味深い。そこに、絵図とともに報告されている疫病予言獣のほとんどは、海中から現れ、5年から7年（妖怪によって違うが、どれもかなりの長期間）の豊作という喜ばしいものと同時に疫病という災厄を予言し、自分の姿を描いて見ればその疫病から逃れられる、と言って海中に去るというパターンだ。

例えば、古くは文政二（1819）年の「姫魚」（ひめうお）と称する妖怪がある。肥前国平戸に出現した、二本の角、女の顔、魚の体を持つ、いわば人魚である。「龍宮よりのお使」と自らを称し、七年間の豊作と「ころり」（チフスのこと）の疫病を予言し、自分の姿を絵に書（ママ）いて見ればその病をのがれるだろうと言って、海中に消えたという。外見は、「魚金色也 長一丈三尺 髪長一丈斗 背ニ宝珠ノ玉三ツ有り」とのこと、口には赤い実をつけた枝をくわえている。同じ文政二年には「神社姫」と称する、同じような形態の予言獣の人魚の摺物が江戸市中に出回ったと、加藤玄悦の『我衣』（わがころも）に記録されているという。

その30年ほど後、京都大学図書館所蔵のアマビエ瓦版直後の嘉永年間（1848～54）に出回ったという摺物「海出人之図」も、国立歴史民俗博物館の示唆に富んだ所蔵物である。これは越後国福嶋潟に出たという人魚を描いている。福嶋潟は、現在は新潟市東方の、海岸から離れた湖沼公園で市の観光スポットとなっているが、この摺物によれば、当時は越後国蒲生郡新堀田城下の脇にある大沼で、「潟」と呼ばれるように砂浜と遠浅の海によって日本海とつながっていた。絵では海のような大波が描かれ、題名からも「海から出た人」である。摺物の説明によれば、夜な夜な福嶋潟で女の声が呼びかけているというので、柴田忠三郎という侍が見届けに行くと、光を放つ人魚が現れて、

我は此水底に住者也、当年の五ヶ年之間、何国ともなく豊年也、且（但カ）十一月頃より流行病にて、人六分通り死す、され共我形を見る者又ハ画を伝へ見るものハ、其憂ひを免るべし、早々世上に告知らしむべしと言捨つゝ、又水中に入にけり。

という次第である。出来事としては、「姫魚」と同じような経緯だが、摺物にある福島潟の名無しの妖怪の姿は、「姫魚」とはかなり違う。豊かに流れる長い黒髪に、豊満な両の乳房はむき出し、片手を顎に当てて柴田忠三郎を見つめている女体の上半身で、下半身は魚であることが分かる鱗がわずかに見えていて、色付きでもある。この姿を見れば、疫病の「憂ひ」が消えるどころか、人生愉快千万と元気になっただろうし、その写し絵は「早々に世上に」広まったことだろう。『歴博』の記事には、この福島潟の人魚の同類、模倣と思われる、江戸時代の他の疫病よけの人魚の絵図も掲載されている。同じ越後国のもので、光を放つのだが、福島潟のものよりも髪は短く、腕は人間のものでも上半身が鱗で覆われているので乳房はなく、下半身は人間の体だが、浦島太郎のような藁の腰巻き、よく言えばバレエのチュチュのようなものを着けて坐している。つぶらな目で可愛らしいが、妖艶度は劣る。

『歴博』170号にはないもので、疫病の予言獣として注目すべき妖怪は、毎日新聞2020年8月21日夕刊に福井県文書館職員の長野栄俊氏が報告しているものがある。尾張徳川家所蔵の「名古屋市蓬左文庫」にある「青窓紀聞」(全204冊)と称する、尾張藩大道寺家家臣水野正信が尾張城下の出来事や各地の風聞を書き留めた文書に残されているという。この無名の妖怪は、体は鱗に覆われ、男性の風貌で、角をはやし、三本足で、両手に一つずつ光る玉を持っている。「青窓紀聞」の記述によると、この妖怪が現れた場所は備後の海辺で、日付は弘化3(1846)年2月19日と極めて断定的である。海辺に毎夜光る物が出るので、役人が調べに行くと、妖怪は「今年から六年の間は大豊作なり。しかし、病がはやり天下の九割の人が突然死ぬ。まぬがれるには我が姿を見るべし」と告げたという。

先に紹介した湯本が報告しているアマビコの類型は、詳細は割愛するが、全てその出現場所が肥後国、日向国、越後国、越前国の海からと地域が極めて限定され、アマビコに遭遇したという侍の名も、「柴田五郎左衛門」、「柴田五郎右衛門」、「柴田某」、「芝田忠太郎」というように似た名前である。このことから、アマビコもアマビエも同一のアーキタイプから出ていることは間違いないだろう。さらに、アマビエ以降の女性の人魚がこのように華やかな変身が続けたことは、彼らの絵図が一様に、疫

病が心配される時期の市中で、庶民の不安解消と一種の鬱憤晴らしに一役かっていたことが推測される。

ここで注目したいことは、これらの妖怪には興味深い共通点があることだ。「青窓紀聞」の妖怪が西日本とはいえ瀬戸内海であることを除けば、これらの疫病よけ予言獣は、日本列島の西の海から出現し、鵜うのような成敗されねばならぬ恐ろしい妖怪というイメージは全くなく、土地の人々に災厄を警告し、その避け方を伝授して、自分から去って行く。つまり「西方からの客人」であることだ。さらに興味深い点は、アマビコと同根とはいえ、アマビエ以前の妖怪は人魚ではあっても、顔が人間で胴体は全て魚で、泳いでいるのに対して、アマビエ以降の妖怪は上半身はもちろん、あるものは下半身まで人間で、泳ぐというよりも、直立したり座したりして、より人間に近い様相であることだ。これを考えると、アマビエは疫病よけ予言獣の一つの転機を示しているように思われる。

2.

日本の近世における疫病よけ予言獣がどうして「西方からの客人」となったかに関して、アマビエをその最も顕著な、そして後継の予言獣の手本となった例として論じたい。

アマビエの絵を見て、私がこれはmedico della pesteの変形ではないかと思った、その起源の地ヨーロッパでは、「ペスト」は今で言う腺ペストだった。発病すると高熱を出し、最後は身体中に黒い斑点が出て死んでいくので、俗に「黒死病」（英語でblack death、イタリア語でmorte nera）と呼ばれた。ペスト菌を媒介するノミがクマネズミから人間に移り、伝染させた。クマネズミは元々ヨーロッパにいなかったが、最初は恐らく十字軍の船に紛れ込んでアジアからヨーロッパに移って来たと考えられている。つまりペストは西洋と東洋の交渉によって、東方からもたらされた災厄である。特に1346年から47年にかけて貿易港コンスタンティノーブル（現在のイスタンブール）から地中海沿岸に広がったペストは、1348年には西ヨーロッパ各地に広まり、49年には北欧からポーランドに、51年にはロシアに達した。この伝播で、ヨーロッパの人口の3分の1が

死んだと考えられている。

ジョヴァンニ・ボッカッチョの『デカメロン』(Giovanni Boccaccio, *Decameron*) (1351)は、まさにこの時のパンデミックから生まれた。ペストが猛威を振るうフィレンツェから田舎に逃れた7人の婦人と3人の紳士が別荘で、一日一人一つずつの物語をして時を過ごした末の100の物語を集めた、という設定である。冒頭の「第一日まえがき」には、当時の西ヨーロッパで最も富裕な金融・商業都市国家であったフィレンツェが、外の広い世界との活発な人的・物的交流のゆえに黒死病に覆い尽くされた状況が、冷酷なりアリティーを持って描かれている。

発病当初は男も女も股^{また}の付け根や腋^{わき}の下に腫物^{はれもの}ができました。そのぐりぐりのあるものは並^{りんご}の林檎ぐらいの大きさに、また中には鶏の卵ぐらいの大きさに腫れました。大小多少の違いはあるが、世間はそれをガヴォッチョロと呼びました。俗にいうぐりぐりで、医者^{よこね}は横痃と呼んだものです。まずは体の二箇所^{ふたところ}にできたその致命的なガヴォッチョロが、今度はところ構わず吹き出て腫れ出します。その次にこの腫物は、多くの人の場合、黒や鉛の色をした斑点となって腕や腰の至る所に表面化します。あるものは数は少ないが大きく、あるものは形は小さいが沢山出てきます。このガヴォッチョロが出たら人間はまちがいなく死にました。

.....

病人が着た物とか病気で死んだ人の持ち物に触った人間以外の動物までもが、病気に罹ったのです。いやそれどころか、あっという間にころりと死にました。いま申した通り、私はある日この目でそのことの実際をしかと見たのです。この病気で死んだ人の^{ぼろき}襦袢切れが道に捨ててありました。たまたまそこへ二匹の豚がやってきました。豚の習性で最初は鼻先であしらって次は歯^{くわ}で銜えます。そして頬^{こす}の辺りへ擦りつけました。するとその直後、二、三度身をよじったか^{こす}と見る間に、まるで毒でも喰らったかのように、二匹とも自分たちが引き摺^ひってきた襦袢切れの上にばたきと倒れて死んだのです。命取りとなった襦袢切れの上でした。(18-20頁)

この疫病には治療法も治療薬もない状況で、医師もなすすべがなかったのだが、『デカメロン』冒頭章には、そのために異常な医療態勢になっていたことも指摘されている—「(当時は免状持ちの正規の医師の他に、医学を全然勉強しなかった人が女も男も医療現場に加わって、その数はそれはたいしたものでした)」(19頁)。これらの、医学の知識もなく正規の医師の訓練も受けていない、詐欺師まがいの含めた者たちが、「ペスト医師」「medico della peste」であった。彼らは患者の家を訪問し、瀉血をしたり、水銀を浴びせたり、時にはカエルやヒルをぐりぐりの上に載せたりする滑稽な療治をした (Byfield, p. 37)。そのような胡散臭い医師であっても、ペスト患者に直接対応する彼らは得難い存在で、それぞれの都市は彼らを公的に雇って重用した。彼らは、貧富の差なくペスト患者の家を訪問診療し、検死を行い、死者の統計を取って市の疫病記録作成に貢献した (Byrne, 169頁)。

ペスト医師がいかに貴重な存在であったかを示す様々なエピソードが伝わっている。1348年、オルヴィエート市はマテオ・フ・アンジェロ (Matteo fu Angelo) なる医師に通常の医師の四倍の年俸を支給したとか、同じく1348年、ヴェネツィアは18名のペスト医師を雇ったが、5名はペストで死亡し、12名は逃亡したか生死不明のまま、ただ一人の医師が生き残ったとか。1650年、バルセロナ市はトゥルトーザ自治体へ二人のペスト医師を派遣したが、彼らは途上で誘拐された。身代金を要求されたバルセロナ市はそれを払ってペスト医師を奪還したとか (Byrne, 168-9頁)。ペスト医師がこのように貴重な存在であった理由は、彼らが診療に従事する過程で、次つぎと罹患して死亡し、常に数が足りず、いかさま医師でももてはやされたからである。

ちなみに、医師ばかりでなく、聖職者の急減も大きな問題となった。葬儀や祭礼を行う聖職者の死亡が続き、どの教区も未曾有の数の後継者養成の必要に迫られた。この時期にヨーロッパ各地に多く出現した能率的な聖職者養成所—seminarium, seminary—が、そのままソルボンヌなどの大学となり、その後今日までヨーロッパの学術の発展を担う高等教育機関となった。ルネッサンスも、この時期に爆発的に高まった新しい知への欲求が引き起こした面が大きいと考えられている。

こうしてペスト医師は、14世紀以降、15、16、17世紀に至るまでヨーロッパに存在し、崇敬され続け、そして皮肉にも、その姿は死の予告としての恐怖の具現でもあった。彼らの存在を特に目立たせたものは、その異様な外見だった。最終的には1630年にシャルル・ドゥロルム(Charles de L'Orme)によって考案されたというペスト医師の装束は、油を引いた薄い防水布でできた首から足元まで隠れる長いコートをもとい、顔全面を覆うマスクは目の部分がガラスで、鼻にあたる箇所は鳥のクチバシのように長く突き出ている。大きなひさしの黒い帽子を被り、手には真っ直ぐな長い杖を持っていた。コートとマスクは、現在の医療従事者がCOVID-19の患者に対応する際の「ハズマツ防護服」と本質的に変わらない。長いクチバシには薬草、香料、薬が詰められていて、薬草と香料とはペスト菌を殺す、あるいは弱めると考えられていた。杖は患者や死体に直接に手を触れないようにするために、現在の「ソーシャル・ディスタンス」と同じ論理である(図3)。

前置きが長くなったが、アマビエの絵を見て私が「これはplague doctorではないか」と思ったのは、アマビエの、ガラスのように煌く^{きらめ}大きな目と鳥のようなクチバシのような口、それから足元まで垂れるコートのような体型のためであった。アマビエに何らかのペスト医師の影響があるのだろうか。

ペストは日本においては明治以前の発生は確認されていない。江戸時代に最も恐れられた疫病は、疱瘡(天然痘)、麻疹、水痘で、江戸幕府は1680年以降、これらの罹患者は35日間「登城遠慮」という決まりになっていたそう(磯田 83頁)。隔離の考え方がすでにあったのだ。それにもかかわらず、歴代将軍15人中14人が疱瘡に罹り、罹らなかったのは8歳で死去した七代将軍のみだった。ただし、「疱瘡は器量定め、はしかは命さだめ」と言われたように、天然痘は顔にあばたが残ることで済むが、麻疹は命を落とすとして最も恐れられた疫病だった。

これらの疫病は、その時その時の感染伝播を辿ると、全て、海を渡って来たものである。例えば、1803年の全国的な麻疹パンデミックは、大陸、朝鮮半島から対馬へ渡り、対馬から長門(山口県)に伝わった、あるいは長崎で大流行して、それから東西一般に伝わった、という記録が

複数ある（磯田 114～116頁）。また、明らかにインフルエンザと思われる悪性の「風」（風邪のこと）は幾度も大流行したが、1820年には長崎から始まり、畿内からさらに広まった記録がある。そのずっと後、1854年に黒船が横浜港へ入った時に、感冒が持ち込まれ、「アメリカ風」と呼ばれ、1862年にも、「西洋の船、崎陽（長崎）に泊してこの病を伝え」と記録されている（磯田 116～119頁）。ヨーロッパにペストが伝わったのが東西の交易の場である貿易港からであったように、日本に疫病が伝わったのも、鎖国時代では長崎、長門など日本の西海岸、つまり西の海からであった。また、19世紀に米国から中国に至る最短航路は、米国西海岸から北上し、アリューシャン列島・千島列島沿いを南下し、津軽海峡と対馬海峡を通過して上海に至るものだった。途中で難破した船の船員が越前・越後、対馬の漁民に救助されて、長崎に送られるケースが少なからずあり、これらの海岸も外国との接触地であった。

ここでさらに視野に入れておきたいことがある。これらの外国船が来た港からは疫病菌が侵入したであろうが、同時に疫病に関する知識ももたらされた。現に、磯田が前掲の情報を得た資料も、長崎に学んだ医学徒の書いたものである。だが、そのような真面目な科学的資料以外に、西からの渡来者が疫病に関する、一般民衆の好奇心をそそる情報を提供した可能性もあるのではないだろうか。そんな中で、「ペスト医師」の絵が一般人の中で出回った可能性がなかっただろうか。

アマビエは、ヨーロッパの「ペスト医師」の姿を日本の庶民の趣向に変形させたもののように思われるのだ。ペスト医師のガラスの目と尖った長い鼻は、輝く目と小鳥のくちばしのような口元になったのではないか。ペスト医師の長いコートとその下にわずかに出ている靴は、魚の鱗に覆われたずんどうの体の下に見える尾びれのような三本足になったのではないか。なぜ三本足なのか。三本目の足は、「ペスト医師」が常に携行していた杖の名残りだったのかもしれない。また、日本には古来、時として、奇形を神の使いのように尊ぶ風習がある。三本足の八咫鳥^{やたがらす}がいい例だ。こうして、ヨーロッパでは疫病治療と死神の具現という、恩恵と恐怖の絡み合った姿が、日本ではその恩恵の面のみが強調された姿になったのではないだろうか。

「ペスト医師」のイメージは、西洋においては、日本と全く逆の方向に進んだ。西洋では19、20世紀から現代に至るまで、「ペスト医師」の顔面防御の装備は、仮面舞踏会やカーニバルの仮装において、死の恐怖を象徴する仮面として生き続けている（図 4）。ヴェネチアのカーニバルで必ず見かけるこの仮面は、再生の祭典であるカーニバルの最中に、死が常に傍に居ることを思い出させるのだ。1999年のスタンリー・キューブリックの映画*Eyes Wide Shut* のクライマックスシーンの仮面舞踏会にもペスト医師の仮面が効果的に使われている。

一方、字や絵を描き、それを入り口に貼って疫病を退散させようという手法は、日本にはすでに普及していた「おまじない」形態だった。よく知られている例は、京都祇園祭の時に、「蘇民将来^{そみんしょうらいのしそんなり}之子孫也」という文を書いた紙をつけた^{ちまき}粽を貼っておけば、その家は疫病から逃れられる、という言い伝えに基づいて、今日でも祇園祭の時にはこれが各戸口に貼られている。また、新潟県では牛の絵を描いた紙を逆さにして戸口に貼り付けると、疫病よけの牛頭天王が、上げた足で悪病神を蹴っ飛ばして追い払うというおまじないだそう（磯田 49頁）。アマビエの場合も、その絵を見たり、他の人々にも見せよというもので、絵（あるいは字）だけで効果があるという、日本古来のかなり安直な疫病よけの手法であるようだ。ペスト医師の絵は、まずは西の海に開いていた海港からその周辺に伝わり、肥後の海から来たことになったのではないだろうか。その類型であるアマビコも福岡湾の妖艶な人魚も、全て、肥後、日向、越後、越前など西の海に開けた場所に現れた妖怪であることも、同様な理由ではないかと思われる。

むすび

これまで述べてきたように、アマビエは日本が、たとえごく限られた場所であっても海外との文物の交渉があったために想像・創作された妖怪で、疫病そのものと同様に、日本が外国に開いた結果として起こった現象であると考えられる。最古の記録では西暦300年ごろ崇神天皇5年に日本列島で疫病が流行し、国民の大半が死んだと伝えられているが、この大昔の疫病ですら海外との交流と人口集中の結果であろうと磯田は推

測している(44頁)。奈良の大仏建立の元となった天然痘パンデミックも、朝鮮半島、中国大陆、そして間接的にはそのさらに西方の地との接触によりもたらされたと考えられる。時代を下って、日本には常に疫病が西方から渡来していたが、疫病と同時に当然、文物ももたらされていた。その中に、西洋の「ベスト医師」の絵姿もあったのではないだろうか。西洋においては恩恵と同時に恐怖の象徴であったイメージが、江戸時代の日本においては、まず恩恵のみになり、妖艶、続いて可愛いイメージに変わった。それが現代においては、まさに「可愛い」ものに変身して、人々に愛され、慰めを与える存在となったことは、日本文化の特異な面を暗示しているのではないだろうか。そして、この可愛いマスコットが、今度は日本から、西洋へ、諸外国へ伝播して行った状況は、まさにグローバル化する日本文化の一例といえるだろう。



図 1



図 2



图 3



图 4

参考文献

- 岩間理紀 (2020.8.21) 「新たな予言獣？江戸後期資料に確認」『毎日新聞』東京版夕刊。
- 磯田道史 (2020.9) 『感染症の日本史』 文藝春秋。
- ボッカッチョ、ジョヴァンニ (2017.3) 『デカメロン』 上 平川祐弘訳 河出書房。
- 湯本豪一 (1999.7) 『明治妖怪新聞』 柏書房。
- 『歴博』 170号 (2012.1) 国立歴史民俗博物館 (電子版)。
- Alt, Matt (April 9, 2020), “From Japan, a Mascot for the Pandemic,” *The New Yorker*, www.newyorker.com.
- Byfield, Ted (2010), *Renaissance: God in Man, A.D. 1300 to 1500: But Amid its Splendors, Night Falls on Medieval Christianity*. Christian History Project.
- Byrne, Joseph Patrick (2006), *Daily Life during the Black Death*. Greenwood Publishing Group.
- “plague doctor” (September 1, 2020) , en.wikipedia.org.
- Thomas, Russell. (April 10, 2020), “Meet Amabie: the pandemic-defeating monster bringing hope to Japan,” *The Guardian*, www.theguardian.com.